

# 人間的労働の経済学的考察（八）

山 本 二 三 丸

は し が き

一 人間的労働の基本的意味……………（以上、第十四卷第四号所載）

二 本来的私的所有のもとの人間的労働

(1) 本来的私的所有の意味

(2) 社会的富の規定

(一)

(一) ……………（以上、第十五卷第三号所載）

(二) ……………（以上、第十五卷第四号所載）

(3) 商品生産における労働の二面性……………（以上、第十六卷第一号所載）

(4) 私的労働の社会的性格……………（以上、第十六卷第二号所載）

(5) 労働の対象化……………（以上、第十六卷第三号所載）

(6) 価値法則……………（以上、第二十九卷第一号所載）

(二)

人間的労働の経済学的考察（八）

(二) ..... (以上、本号所載)  
(三) ..... (以下、次号所載予定)

(7) 所有法則 (交換の法則)

(8) 価値の自立化

(9) 発展法則

(10) 商品生産のもとでの人間的労働のあり方

三 人間的労働力の商品化

四 資本制的私的所有のもとでの人間的労働

五 社会的所有のもとでの人間的労働

六 総括

## 二 本来的私的所有のもとでの人間的労働

### (6) 価値法則

(一)

さきにも述べたように、価値法則についての誤解や曲解のなかで、もっともひろく流布されている代表的なものは、「価値と価格との一致」または「価値とおりの交換」||「等価交換」をもって「価値法則の貫徹」とし、「価値と価格との不一致」または「不等価交換」をもって「価値法則の侵害または修正」とする解釈である。こうした考え方は、それが経済法則の完全な無理解を示すもので、まさに反マルクスの・反科学的本質を示したものにほかならないことは、わたしが機会あるごとに論証してきたところである。この種の初歩的曲解をのぞけば、その他の大方の解釈は、多か

れ少なかれ、マルクスの一八六八年七月十一日付クーゲルマンあての手紙のなかの叙述についての、同じく俗物的解釈にもとづいているようである。宇野氏の「価値法則」論も、この範疇に属するものといってよいが、宇野氏の場合には、『資本論』の叙述についての一種特別な読み方といわゆる「原理論」なるものが基本となっていて、この基本をいわば強化する意味で、独特の「価値法則」論が編み出されているとみられる。そこでまず、この基本について大体のところをあらかじめつかんでおいて、これとの関連で氏の「価値法則」論を簡単にみてみることにしよう。

(1) 『資本論』の「原理論」的読み方

宇野氏の名著『経済原論』（岩波全書）の第二篇「生産論」の第一章「資本の生産過程」の第一節と第二節は、それぞれ「労働生産過程」、「価値形成増殖過程」という特異な表題をもっているが、その第二節では、「価値の実体」と「価値形成過程」の説明が、「労働力の再生産に要する一日の生活資料が六時間の労働で生産され、その代価を三志とすれば」（前出、五三—五四ページ、傍点—山本）というたったひとつの「まえおき」で、一挙に片づけられていることは、すでに前稿で指摘されたとおりである。ところでこのような「価値形成過程」の説明の終りにおかれたつぎの一節は、たんに宇野氏の「価値法則」論の性格のみならず、一般に宇野氏による「原理論」的発想の性格をとらえるうえで、まことに貴重な素材を提供しているとおもわれるので、以下で、その内容をいささか吟味してみることになろう。

「例えば労働者は自己の六時間の労働生産物を、たとい自ら生産した生活資料にしても、直接には得ることができないのであって、三志なる労働力の代価を通して買戻すのである。それは単に労働生産物が商品として交換されるというのではなく、生産過程自身が商品形態をもって行われることを示すものにほかならない。かくしてまたあらゆる生産物がその生産に要する労働時間によってえられるという労働生産過程の一般的原则は、商品経済の下にあつては、その交換の基準としての価値法則としてあらわれるのである」（前出、五五ページ、傍点—山本）。

まず、はじめの文章からみていくことにしよう。宇野氏がこの文章を作成した「根拠」となっているのは、右の第二節の冒頭においてなんのこともわりもなしに突如として出てきた、「まえおき」である。この「まえおき」については、まず、「その代価」という一見簡単な言葉に注意を払う必要がある。ここで「その」とは、いったい、なにを指しているのか？ おそらく「一日の生活資料」であろう。しかし、「六時間の労働で生産され」たものが「三志の代価」をもつというのであるから、「六時間の労働」は「三志の代価」に直結されているものといわざるをえないであろう。ところで、「代価」とは、どういうものか？ 「代価」という日本語の意味は、ねだんであり、経済的用語であらわせば、それは、商品の交換価値、それも貨幣商品で表現されたものとしての交換価値である。そこで、右の文章の意味するところを正確に表現すれば、つぎのようになるであろう。——「一日の生活資料は六時間の労働をあらわし、それは三志の交換価値をもつ」。「代価」という通俗語がくりかえし愛用されているという事実がはっきり示しているように、宇野氏の関心は、もっぱら「交換価値」の上のみある。「価値」と「交換価値」との明白な本質的差異を考慮にいれば、正確には、宇野氏の視野からは「価値」は脱落してそのかわりに「交換価値」だけがある、といわなければならぬ。この事実が、宇野氏が、マルクスの立場ではなくして、いまから二百年も昔のA・スミスの立場を踏襲しているにちがいないことを物語るものといつてよい。宇野氏が「三志の交換価値」と「六時間の労働」とを直結しているように、A・スミスは、二世紀まえに、「労働はいっさいの商品の交換価値の**実質的尺度**である」（前出、『諸国民の富』、三二ページ、大内・松川訳一〇五ページ）という命題をうちたて、これをかれの「労働価値説」の基本に据えている。いや、歴史的観点から正確に表現すれば、二百年まえにスミスが「労働こそは、最初の価格、つまりいっさいのものに支払われた本源的な購買貨幣であ」（前出、三二ページ、訳一〇六ページ）って、「労働の分量」によって

「交換価値の大きさ」がきまるといふ基本命題を確立したのにたいして、それから二百年後に出現した自称「マルクス経済学者」宇野弘蔵氏は、それと寸分ちがわなことを、はるかに紛らわしい表現でくりかえしている、といわなければならない。こうした歴史的事実を念頭におくときには、A・スミスを根本的に批判したマルクスが、その百年後に宇野氏によって「根本的」に批判される羽目におちいらざるをえないという「事態」も、まことに理の当然といつてよい。

ところで、第一の文章の中の「三志なる労働力の代価」という文字は、スミスにはまったく見られない「労働力」という言葉が用いられているという点に注意をばらう必要がある。つまり、宇野氏によれば、「六時間の労働の代価」が三志であるだけでなく、「労働力の代価」も同じく三志である、というわけである。「六時間の労働の代価」というのは、スミスの立場にたてば、容易にのみこめる。だが「労働力の代価」というのは、そう簡単にはのみこめない。労働力とは、いったい、どういう力であるのか？　そもそも、力の代価というものが、どのように計算されるのか？

ここで、われわれがはっきりと確認しておかなければならないのは、肝腎の「労働力」について、それがどういふものであるかということについて、宇野氏の原著『経済原論』のなかには、一言半句の説明すら見当らない、という事実である。ところが、『経済原論』のなかでは「労働力の商品化」という言葉そのものがきわめて重大な意義をもつものとされておき、あえて誇張しているならば、宇野氏のいわゆる「原理論」のすべては、この「労働力の商品化」という文字を中核として構築されているといつてもよいほどのものとなっている。かくも至大な意義を賦与された概念について、しかもスミスの見地からはとうていとらえることのできない、そして一般常識では手の届かない「理論的」用語について、当の論者は、なぜ、十分な説明を、いや多少なりとも説明を、あたえようとはしないのか？　自己の

「理論体系」にとって決定的な意義をもつ基本的な概念については、それが通俗的観念では理解しがたい内容のものであればあるだけ、その概念をひとつの柱として自己の「理論体系」の構築をはかろうとする論者は、それだけですますこれについて十分明確な説明をおこなう必要がある。これは、科学にたずさわる誠実な学者にとっての最低の、基本的な義務である。それゆえ、わたしが、読者諸君とともに、宇野氏にたいして、「労働力」の意味内容についての明確な説明を一日もはやく提示するよう、つよく要請することは、決して氏にたいして非礼をおかすことにはならないであろう。いまからでもおそくはない、「労働力」とは、いったい、どういうものか？ をはっきり説明したうえで、「労働力の代価」というのは、どういうものか、それはどうしてきめられるかをよく説明してもらいたいものである。<sup>(33)</sup>

(33) 「成り上りの名声」が幅をきかず俗物的権威の支配する日本の「学界」では、不消化・無内容の雑炊をできるだけむつかしい学問的表題をつけた大著の形で——「優秀」商品として——売り出すことが、その「名声」を手に入れる早道のひとつとなっているようである。『恐慌論』などという表題は、もともと「効果的」なものとしてさかんにつかわれる。自分でもわけわからない「理論的」たわごとをつめこんだ「大著」——大型商品——を売り出しておいて、さてその反響やいかに胸を躍らせてひそかに待ちもつけたものの、珍らしがるのは初歩的學生だけで、達眼の士はこれには眼もくれないといった結果が生じるということも、けっして稀ではない。かくてはならじと、むりやりにも反響をひきだすべを思いめぐらした末、考えつくのは、こうした「不遜な」達眼の士にたいして、つぎの「公開質問状」を公表するという手である、——「わが輩は、貴公の唱えている理論にたいしてその致命的な欠陥と誤りを指摘して独自の理論を展開した大著を公刊し、貴公の側よりの当然の論駁または自己批判を切に要請したのであるが、それにもかかわらず、なんの応答もなく、黙殺という手をつかっているのは、学者の風上にもおけない仕儀といわなければならない。早々に、拙著にたいする論駁を公表するか、さもなければ、自説にたいする自己批判を公けにすべきである」。

こうした「公開質問状」は、自分の論著をひとに読ませ「売りひろめる」ためのものであるが、わたしが、宇野氏にたいし

て、右のような要請を公けに提起しているのは、いうまでもなく、宇野氏の主張の内容をひろく一般に知ってもらい、わたしもそれを知ることができるようにするためのものであって、それ以外の意味はない。もし、こうした学者としての当然の義務の遂行などというつまらないことは大先生が手を下すまでもないものだといふのであれば、俗に「御三家から外様、等々にいたるまで」といわれるほどに「原理論」の信奉者はあまたいるようであるから、そのうちのどれか一人が大先生に代ってその勞をとられても結構である。一日も早くはつきりした説明を公表してもらいたい。もっとも、そのときは、どんな名答であっても、おそらく大先生の認可はえられないものと覚悟すべきではあるうが。

宇野氏の主著『經濟原論』がはじめてこの世に出たのは昭和二十五年（一九五〇年）、同じ内容の新著『經濟原論』（岩波全書）の第四刷は一九六六年に發行され、それ以後にも変わりはないのであるから、このことは、客觀的には、右の最低の基本的義務の履行を、宇野氏が意識的に怠ってきたことを示しているものといつてよい。あるいは、おそらくは宇野氏自身の心情により近い表現をもってすれば、氏はここ四分の一世紀のあいだ、右の二つの基本的概念の説明を示すことの必要を全然認めない立場を堅持してきたものだ、ともいえよう。だが、「この基本的概念について、どんな説明をもおこなうことは、まったく不要だ」とする宇野氏の考え方そのものこそ、まさに問題なのである。なぜか？

なぜならば、この「労働力」という概念こそは、マルクスがはじめて科学的に確立したものであり、マルクスはこの「労働力」概念によって、これまで「労働」そのものを「交換価値」に直結する非科学的「労働価値説」を固執していたために必然的に解決不可能な矛盾に陥り破産をとげざるをえなかった古典派経済学にたいする根本的批判をなすことができる、こうしてはじめて真の歴史科学としてのマルクス経済学をうちたてることができたからであり、したがって、最良の古典派経済学者といえどもひとりとして把握できず、それゆえ今日でも一般常識・俗物的観

念の持主にとうてい理解することのできない概念、そしてマルクスがはじめて解明し確立しえたこの難解でもありまた決定的に重大な意義をもつ「労働力」という概念をば、一言半句の説明もせずにその論著のなかでくりかえしかかっているということは、客観的にみるならば、その論者が、マルクスによって『資本論』の中に明示されている「労働力」概念の内容について一般読者が多少とも読み知っていることを予想し、そこにあるマルクスの説明を予備知識としてもっているであろうことを当の論者は「たくみに利用」しているものだ、ということを疑いもなく示しているからである。こうした「予想」と、その予想にもとづく「利用」——正確には「悪用」——というところに、ほかならぬマルクスを超越すると称する「原理論」学者のなみなならぬ狡智のほどが端的に示されているといつてよい。たいていの読者は、『資本論』第一巻第四章のなかの「労働力」概念にかんするマルクスの厳密な叙述を一読または再読するが、しかし、この概念の意味内容を十分に理解することはきわめて稀であり、いわんや、マルクスの理論体系の中でそれがどのような「位置」を占めているかをとらえることは至難であるために、いきおいそれについての漠然・模糊としたとらえ方だけで読み過ぎる結果となるのであって、このような曖昧・模糊たる中途半端なとらえ方こそ、もっぱら『資本論』の内容だけを素材としてしかもマルクスのそれとまったくちがった解釈のもとでこれをつくりかえた「原理論」なるものがなんとはなしに売り弘められるようになる「社会的」な地盤をなしているのである。

では、マルクスにあつては、「労働力」概念は、どのように説明されているか？　といえは、もちろん、マルクスは、「原理論」学者のように、一言半句の説明もしないとか、「先人の禰で角力をとる」などというけちな考えは毛頭もちあわしていない。周知のように、マルクスは、第一巻第四章第三節を「労働力の購買と販売」と題し、この第三節全部を「労働力」および「労働力の価値規定」の説明にあてているのである。この第三節においてとくに注意すべ



きことは、そこでは、「労働力」についての基本的な説明にもとづいて、「労働力」が「商品」としてとらえられていること、したがって「労働力」という「特別の商品」の、特別の「使用価値」と「価値」が厳密に論究されている、という点である。このような「労働力」＝商品の厳密な規定があたえられえたのは、すでに第一巻第一章において、「労働力」以外の、人間の外部に存在する生産物＝商品につき、その二要因についての論究がおこなわれ、「価値の実体」および「価値規定」について十分的確な究明がなしとげられているからである。「労働力」＝商品の内容の正確な説明は、マルクス自身がくりかえし強調しているように、「労働の二面性」の的確な把握にもとづいて「価値の実体」を究明し、それによつてはじめて真に科学的な「価値」概念を確立することをすでになしとげていたがゆえにこそ、可能かつ必然となつたのである。<sup>(34)</sup>

(34) 「価値の実体」および「価値の大きさの規定」が十分解明され、科学的な「価値」概念が確立されたところではじめて「労働力」＝商品の使用価値と価値とが十分ただししく解明されうるし、また解明されなければならないということは、正常な論理的思考能力をもつていて先入観なしに『資本論』を読むことを心がける人にとつては、自明のことである。だが、マルクスの叙述を生ま半可に通読してマルクスの欠陥や誤謬を指摘することでマルクスを超越してしまおうという誇大妄想にとりつかれた俗物の眼には、万事が逆立ちして映らざるをえない。こうした手合にとつては、右の自明のことをさらに詳しく、正確に解きあかしている、つぎの、マルクスの盟友エンゲルスのすぐれた叙述さえも、もちろん「馬の耳に念仏」であるといつてよい。

「剰余価値がなんであるかを知るために、かれ〔マルクス〕は、価値がなんであるか知らなければならなかった。リカードの価値論そのものがまず第一に批判のもとにおかれなければならなかった。こうして、マルクスは労働を研究してその価値形成的性質に到達した。そして、はじめて、いかなる労働が、なにゆえに、いかにして、価値を形成するかということ、および、およそ価値とはこの種の労働の凝固したものにはかならないということ、を、確定した。——これこそは、ロードベルトウスが最後まで理解しなかつた点である。つぎにマルクスは、商品と貨幣との関係を研究して、いかにして、またなにゆえに、

商品に内在する価値属性によって、商品が、そして商品交換が、商品と貨幣との対立を生みださざるをえないかを論証した。この論証の上に築かれたかれの貨幣理論は、最初の十全な貨幣理論であり、いまでは暗黙のうち一般に承認されているものである。かれは貨幣の資本への転化を研究して、この転化が労働力の売買にもとづいていることを証明した。かれは、ここで労働のかわりに労働力を、価値創造的属性をもつてくることよってリカード学派の破滅の原因になった諸難点の一つを、すなわち、資本と労働との相互交換を労働による価値規定のリカードの法則と調和させることの不可能を、一挙に解決した（『資本論』第二巻へのエンゲルスの「序文」、インスティトゥット版第二巻、一六一―一七ページ、傍点―エンゲルス、ゴシック体―山本）。

ところで、これまでたびたび指摘してきたように、『資本論』第一巻第一章第一節のなかで「価値の実体」と「価値の大きさの規定」が説明されていることは誤りであって、「資本の生産過程」の説明のところこそ「価値の実体」の解明がなされるべきだという、マルクスと正反対の主張をくりかえしかかかっている宇野氏自身は、その主著のなかの「資本の生産過程」において、はたして「価値の実体」の説明をしているか？ といえは、おどろいたことに、その説明はまったくないのである。氏は、そこでは、なんの説明もなしにいきなり「労働力」という「商品」をもちだして、たちまち「労働力の代価は三志」とか、「六時間の労働の代価は三志」などといった文章をかかかて、これからすぐさま「価値形成増殖過程」なるものの説明にそのまま移っているのであって、このあたるところでもまた「価値の実体」の説明は、一言半句もない。こうして、氏の主著二七七ページ全部を通じて、なんと、「価値の実体」についての説明は影も形もなく、おまけに、「商品の価値」とは「すべて一様に金何円という価格を有している」という「同質性」をいうのであるという、主著第一章冒頭のたった一つの文章が、氏独特の「価値」概念を説明する唯一の個所となっている始末である。

ところで、宇野氏の愛好する「労働力の代価」という言葉は、いったい、どういうことを意味するものであるか？ 科学的な経済理論のなかでこれがつかわれるときには、その意味する内容は、俗物が考えるほど簡単なものではないのである。さきに述べたところをくりかえして簡単に説明すれば、それは、第一に「価値」概念の確定、第二に「貨幣理論」の確定、第三に「価格」概念の確定、第四に「労働力」の内容の明確化、第五に「労働力」・商品の価値規定の把握、第六に「労働力」・商品の価値の貨幣的表現としての価格の把握を前提とし、またこの六つのもをそのなかにふくんでいるのである。ところが、宇野氏は、第一巻第一章から第四章までの科学的理論の展開をきわめて不十分かつずさんにも読み知っていながら、それらについてはいっさい「無視」して、さきにもたような読者の曖昧・模糊たる印象に便乗して、いきなり「労働力の代価」という俗物的表現をもちだし、これによって「資本の生産過程」の説明も、「価値の実体」の「論証」もはじめて可能になるといった主張をひたすらくりかえし、マルクスの「論証」の欠陥と誤りなるものの宣伝に大童である。こういうやり方、方を正常な日本語で正確に表現するならば、それは、まさしくペテン、もしくはいかさまであり、こういうやり方を得意として善意の読者の眼をくらます人物には、ペテン師、もしくはいかさま師という正確な表現が存するのである。

さらにまた、宇野氏が細心の注意をはらってくりかえし用いている、「一日の生活資料の代価が三志」とか、「六時間の労働の代価が三志」とか、「労働力の代価が三志」とかいった言葉が示している二つの事実、すなわち、一つは、氏の念頭にあるのもっぱら「ねだん」つまり「貨幣に表現された交換価値」だけであること、そして、二つは、なんの規定ももない「労働」がこの「ねだん」・「交換価値」に直結されて論じられていることは、客観的にみてなにを意味するか？ といえ、読者もすてにお気づきのよう、それは、宇野氏の「原理論」なるもののなかには科学的な

「価値」概念が完全に欠落していること、そのかわりにそこにあるのは、二百年前の古典派経済学者のそれと全く同じ俗物的な「価値」概念、つまり「交換におけるねうち」という意味の「価値」だけであること、この唯一の「価値」である「交換価値」が、古典派同様、「生きた労働」、規定なしの「労働」に結びつけられて「労働による価値の規定」という、まさに古典派のそれと同じ「価値法則」が氏の念頭を占めているということ、を物語っているのである。それゆえ、事柄の性質上、宇野氏の独特の「価値」概念と同じく独特の「価値法則」論とを検討することとは、マルクスがいかに古典派経済学者のブルジョア的視野にとらわれた理論体系を批判しこれをいわば完全に「揚棄」しつくしたかということであらためて「追体験」するという側面をもたざるをえないのである。もっとも、古典派理論の全面的批判の上にマルクスが確立しえた科学的理論をまたぞろ俗物的見地からひっくりかえしてかびの生えたいわゆる「労働価値説」を新しい体裁のもとに、マルクスの名を冠して売りだしている手合を問題にせざるをえないわれわれとしては、そのほかに錯乱的論理を暴露し、連続するたわごとの真意を解きあかす<sup>(35)</sup>という、甚だ労多く報われることすくない手数が要求されているものとはなっているのであるが。

(35) このような「余計な」配慮の必要という観点からみるならば、宇野氏が連発する「労働力の代価」という俗物的表現も単には見過せないものをもっているといつてよい。おそらく、氏は、その主著の冒頭の有名な「価値」概念、つまり、「すべてに金何円という価格を有している」という「同質性」をもって「商品価値」であるととする俗物的表象そのままの「価値」概念をもって「原理論」を一貫的に構築しているものであるが、マルクスの科学的な理論体系にあっては、「資本の生産過程」、つまり「剰余価値の生産」の説明にさいしては、必ず「労働力の価値」を問題にしており、「労働力の代価」は問題にされていない。「剰余価値の生産」が説明されたところで、はじめて、「労働力の価格」が問題としてとりあげられ、「労働力の価格の労働の価格への転化」がそこで的確に究明されることになっている。ところで、「資本の生産過程」の説明にあつた

て、「労働力の価値」という文字をつかえば、当然に「資本の生産過程」に先き立って「労働力の価値規定」の説明をあたえる必要が生じ、それはまた、必然的に「価値の実体」と「価値の大きさの規定」についてあらかじめ十分な説明をあたえておく必要があることを誰にでもさとらせることになる。つまり、『資本論』の叙述とまったく同じ理論展開が必要だということかひとりでに判明することになり、『資本論』の理論展開の順序をひっくりかえそうという、「原理論」専門家の主張のまやしぶりが白日のもとにさらされる危険性が濃厚である。それにひきかえ、「労働力の代価」という俗物的表象びつたりの表現だけにしておけば、「価値規定」の解明があらかじめ必要な要件となっているというような、「むづかしい」ことは、いっさい、読者の頭に思いうかばないで、まんまと氏の手の中におちいることになるという次第である。そしてまた、このところを、「労働力の価値」ではなく「労働力の代価」としておくこそが、氏の「原理論」をつらぬくところのもっとも基礎的な「価値」概念、すなわち「すべて一様に金何円という価格を有している」という「同質性」をもって「価値」であるとする画期的な「価値」概念を徹頭徹尾堅持し、あわせて内外に発揚するゆえんでもあるのである。

右のような第一の文章につづいて、第二の文章のなかには、「生産過程自身が商品形態をもって行われる」という注目すべき叙述があり、第三の文章のなかには、「労働生産過程」とか「交換の基準としての価値法則」とかいった、いずれ劣らぬ画期的メイ文句が見出され、これらはすべて、宇野氏の「原理論」的視角を特徴づけるものとして重要な意義をもっているものばかりである。そこで、つぎに、考察の便宜上、「労働生産過程」という言葉をとりあげ、そのつぎに「生産過程自身が商品形態をもって行われる」という文章をとりあげることにしてしよう。ただし、「交換の基準としての価値法則」という言葉は、つぎの節で氏の「価値法則」論を検討するさいに、あわせてとりあげることにしてしよう。

まず、「労働生産過程」について。この奇妙な言葉は、誰でもすぐわかるように、マルクスの『資本論』の中に出てくる二つの用語——「労働過程」と「生産過程」——を連結してつくったものである。マルクスの二つの用語は、それぞれ明確な意味をもつ、れっきとした経済学的概念である。だが、この二つの用語をくっつけてひねりだされた

「労働生産過程」という文句は、いったい、なにを意味することができるであろうか？ われわれは、まず、この珍妙な文字を組立てている要素ともいふべき二つの用語の意味を確認することによって、この世紀的造成語の正体を見とどけることにしよう。まず「労働過程」とは、なにか？ それは、人間の労働力の支出⇨流動がおこなわれる過程であり、この労働力の支出⇨流動は、マルクスがはじめて解明したように、具体的形態における支出つまり具体的労働と、人間の労働力の支出そのもの、またはそのたんなる支出⇨流動としての抽象的労働との、二面から成っている。では、どうして、この二面の支出⇨流動がおこなわれるか？ 「労働過程」はなんのためにあるか？ といえ、それは、いうまでもなく、人間および社会の存続にとって必要な生産物を生産するためである。では、右のような人間の労働力の支出⇨流動の二面性は、この必要生産物を生産する人間の主体的活動にとって、どういう意味をもつか？ なぜ、労働の二面をとらえなければ、生産の過程を理解することができないのか？

それは、こうである。労働の二面性を明確につかんでいなければ、つまり、たんなる労働ということだけしか知らなければ、生産の過程はまったくつかむことができず、必要生産物の必要量の生産はまったくできないからである。たんなる労働というだけでは、人間が労働して物をつくるということ以上には、なにもわからない。ある特定の形態の必要生産物をつくるには、人間の労働力の支出⇨流動は、その特定の形態を生み出すような、特定の形態を規定された合目的支出でなければならず、同じように特定の規定された形態の労働対象および労働手段が必要である。特定の労働手段を媒介として特定の労働対象の形態を合目的に変化させるために、人間の労働力の支出⇨流動は、特定の具体的・有形的形態をとらねばならず、この合目的流動は明確にとらえられていなければならない。また、それと同時に、この特定の合目的形態をとって人間の労働力の支出⇨流動のそのものがとだけおこなわれるかという、

その支出・流動そのものの分量もできるだけ明確に——または近似的にせよ——とらえられていなければならぬ。い  
うまでもなく、この労働力の支出・流動の分量は、支出の具体的形態のいかんにかかわりなく、むしろすべての具体  
的形態に共通なものとして、具体的形態を捨象された、抽象的・人間的労働の分量でなければならぬ。このように  
して、労働の二面性を正しくつかみ、特定の合目的形態のもとに、特定分量の人間的労働力の支出・流動をおこな  
うことよって、はじめて、特定の形態の必要生産物のある特定必要量を生産することが可能となるのである。とこ  
ろで、この労働の二面性の把握は、マルクスがすでに指摘しているように、私的所有のもとでの労働生産物の商品形  
態——これは、「商品の法則」といってもよい——の理解にとつて、決定的な意味をもっている。簡単にいうなら  
ば、人間は、生産における活動主体として、人間的労働力を支出し、その一面における具体的労働により労働手段を  
媒介として労働対象の形態を合目的に変化させることよって労働生産物・商品の使用価値をつくり出すと同時に  
に、他の一面における抽象的労働によりその対象化として生産物・商品の価値をつくり出すのであって、これが、ま  
さしく私的所有のもとでの労働過程の内容であり、またいいかえれば労働生産物・商品の生産過程の内容である。こ  
れによつてもわかるように、労働過程は労働生産物・商品を生産する過程にほかならないのであって、労働過程の欠  
けた生産過程はなく、また、生産過程を離れては労働過程は存立しない。それゆえ、労働過程と生産過程とは、同じ  
一つの過程、すなわち、人間的労働力の担い手である人間がその主体的活動によつて必要生産物をつくり出す過程を  
意味するものであって、ただ、前者が人間的労働力の支出・流動という主体的活動を中心としてこの過程をとらえた  
ものであるのたいして、後者はその主体的活動の結果としてつくりだされる生産物に重きをおいてこれをとらえた  
ものだという、ちがいがあはるにすぎない。このように、労働過程と生産過程とは、同じ人間の主体的活動の過程を指

していったもので、そのとらえ方または視点のちがいがあただけだというのが、これら二つの用語の第一の意味である。ところで、「労働過程」が「生産過程」と同じものを意味するからといっても、その反対に「生産過程」は「労働過程」をもってつくられるかといえ、必ずしもそうではないのである。つまり、必要生産物をつくりだす過程のうちには、人間の労働力の支出＝流動がおこなわれないで、労働力以外の自然諸力の作用だけによって形態変化の過程が進行するという場合がある。たとえば、葡萄酒の醸造などは、その顕著なものである。それゆえ、このような場合を考慮にいれるならば、労働過程は生産過程のうち的一部分、しかも基本的な主要部分をなすものである、といわなければならない。これが、右の二つの用語の第二の意味であって、これら二つの用語は、その他の意味をもち、したがって、特別の限定または規定なしに、これらとちがった意味にもちいることは、文字どおり濫用であり、論理的錯乱を示すものといつてよい。

以上述べてきたところによって宇野氏の造成に成る「労働生産過程」という言葉をみてみるならば、それが完全に無意味な重複語であつて、かえつてその創造者自身の理論的ならびに論理的錯乱を露呈するだけのたわごとにすぎないということは、明瞭すぎるくらい明瞭である。それは、ちよつと「精神分裂精神障害症」という言葉と完全に同じ性質のものである。では、マルクスを超越すると自他ともに称するほどの「原理論」発明家は、なぜ、このような明白な錯乱の重複語をあえて製作してこれを公けに弘めているのであろうか？ おもむに、この世紀的発明家の斬新な思いつきの素材はひとつ残らずマルクスの著述の中に見出されるものであつて、右の珍妙な重複語についても、同様の事情が介在するものと推察されるのである。

マルクスは、これまで述べてきたように——そしてまた、本論稿の注（34）に示されているエンゲルスの第二巻へ



の「序文」のなかの記述が明らかに示しているように——、「資本論」第一卷第一章第一節において、「労働の二面性」の的確な把握にもとづいてまず科学的な「価値」概念を確立し、この「価値」概念を基本として「価値形態」を究明することによって貨幣形態、つまり貨幣商品の発生を論証し、貨幣の基本的諸機能を説明しおえたところではじめて、第四章において「貨幣の資本への転化」を追究し、その「転化」の「鍵」を成すものとしてはじめて「労働力」商品を取りあげ、この特別の商品の独自の「使用価値」と同じく独自の「価値」とを——すでに説明され確立された科学的な「価値」概念にもとづいて——明確にし、このような独自の「使用価値」と「価値」とをもつ「労働力」商品が、資本家により労働市場で購買されて、さて、それがいかに消費・支出されて「首尾よく」剰余価値が生産されるかということを究明しているのであって、それがほかならぬ第四章につづく第五章の内容である。この第五章は「労働過程と価値増殖過程」と題され、その第一節では「労働過程」が、第二節では「価値増殖過程」が論究されている。この章は、さきの「労働の二面性」の把握にもとづく「価値」概念の確立をはっきりふまえて、そのうえで、資本家の購入した「労働力」商品消費、つまり資本家の指図のもとでの人間的労働力の支出・流動が、その一面の具体的労働により「形態変化」をもたらすことによって労働生産物・商品の使用価値をつくりだすと同時に、他の一面の抽象的労働が労働生産物に対象化して労働生産物・商品の価値を形成するということを詳細に究明しているものである。そして、その第一の側面、すなわち具体的労働による「形態変化」を、つまり労働生産物・商品の使用価値生産をとりあげているのがその第一節「労働過程」であり、さらにその第二の側面、すなわち抽象的・人間的労働による労働生産物・商品の価値形成の過程を説明し、この労働生産物・商品の価値が、資本家により最初に投下された価値量をかならず超過し、したがって当然そこに剰余価値の生産がおこなわれざるをえないことを明確に論証して

いるのが、その第二節「価値増殖過程」である。それゆえ、第五章第一節の「労働過程」は、二面における人間の労働力の支出・流動としての労働の過程をとりあつたものではなく、たんにその一面を、すなわち具体的形態における労働の過程だけを論じているものである。このことは、正常な国語的理解能力のある者で第一節の内容を通読しさえすれば、問題なく明白なことであるが、なお——マルクスの明記した文字がその眼に入らないひとのために——念のため、この「労働過程」が具体的労働の面のみを指したものだということをマルクス自身が明記しているところを、第一節のなかから、二つだけ引用しておこう。

「……資本家が労働者につくらせるものは、ある特殊な使用価値、ある一定の品物(Atiked)である。使用価値、または財貨(Güter)の生産は、それが資本家のために、資本家の統制のもとでおこなわれることによって、その一般的な性質を変えるものではない。それゆえ労働過程は、まず第一に、どんな特定の社会的形態にもかわりなく考察されなければならないのである」(前出、一八五ページ、傍点はインスティット版のもの、ゴシック体—山本)。

「これまでわれわれがその単純な抽象的な諸契機について述べてきたような労働過程は、使用価値をつくるための合目的活動であり、人間の欲望を満足させるための自然的なもの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永久的な自然条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会的形態にひとしく共通したものであった」(前出、一九二ページ、傍点はインスティット版のもの、ゴシック体—山本)。

みられるように、資本による商品の生産過程が考察の対象であるからこそ、マルクスは、「労働の二面性」とかたく結びついた「価値」概念の明確な把握にもとづいて、まず第一節ではこの生産過程の一面、すなわち商品の使用価値

値を生産する過程を考察しているのであって、これがここでの「労働過程」の意味である。そして、つぎの第二節で生産過程の他の一面、すなわち商品の価値をつくりだす過程。「価値形成過程」が考察され、かくして、労働過程と価値形成過程との統一として、まず資本による商品の生産過程が把握され、ただしく論究されているのである。それゆえ、「労働過程」という言葉が、資本による商品の生産過程の一面を成すものとして用いられていることは、疑いがない。宇野氏による「労働生産過程」という新造語が途方もなく錯乱したたわごとだということは、いまや誰の目にも明らかであるといつてよい。

さて、つぎに問題となるのは、「生産過程自身が商品形態をもって行われる」という、氏独特の特異な文章である。宇野氏はまた、同じ内容をあらわした「商品による商品の生産過程」という文句もこよなく愛好するところとなっており、氏はこの文句を「たくみに」あやつって、「商品による商品の生産過程」であるところの「資本の生産過程」においてこそ「価値の実体」は「論証」されるべきであるのに、マルクスはこのことがわからないで第一巻第一章で「価値の実体」をはやくも説くことで重大な誤りをおかしているという、マルクス非難をうまず述べたてている。そこで、右の特異な文章の中味をみるまえに、読者のお許しをいただいで、宇野氏によるマルクス非難の論じ方、その「秘訣」なるものを、実例についてうかがっておくことにしよう。

主著『経済原論』（岩波全書）の「序論」の最後の節のなかで、宇野氏は、

「資本論」が、その第一巻を「資本の生産過程」と題しながら、またその労働価値説を商品の生産に基いて最初に論じながらも先ず商品、貨幣、資本の形態規定を展開し、資本の出現の後に始めてあらゆる経済の仕方に共通な労働過程を論じて、資本の生産過程を説いているのは、なお方法的には不明確なるものを残しながらも、……」（前出、一六ページ、傍点―山本）

と述べ、右の「資本の生産過程を説いている」という個所につきのような注をつけている。

「資本論」は、第一巻の第一章商品の最初に、生産物の商品形態が主題たることを指摘し、使用価値と価値とが商品の二要因をなすことを明らかにすると直ちに価値の実体を、商品の生産によってその生産に要する労働として説くのであるが、商品の生産過程自身はここではなお解明されてはいない。また実際商品は資本と異って生産の形態をなすものではなく、その生産過程なるものは、一般的なる生産過程を包摂する特殊形態の生産過程として説きうるものではない。マルクスは、本文に指摘したように、後に「絶対的剰余価値の生産」と題する第三篇において資本の生産過程を説くとき始めて、その篇の最初に「労働過程」を説くのである。しかしすでに第一章で商品の生産を説いているために反ってこの「労働過程」は、一般的な労働生産過程としての規定を十分には展開しえないことになっている。この点については拙著『経済学方法論』のⅣの一、「価値論の論証について」を参照せられたい（前出、一六一―一七ページ、傍点―山本）。

ここにかかげられた二つの引用のなかで、とりわけ人目をひく特異な主張を示すものを取りあげてみよう。宇野氏は、はじめに「商品、貨幣、資本の形態規定」と言っているが、これは、いうまでなく有名な氏の持論——「商品、貨幣、資本は流通形態であって、生産過程とも生産関係ともならん関連するものではない」と同じ趣旨のものでなければならぬ。ところが、あとでは、「実際商品は資本と異って生産の形態をなすものではない」という断定が出てくる。このあとの文章の意味を、正常な国語的解釈と論理的思考をもって読みとるならば、「商品は生産の形態ではないが、資本は生産の形態である」ということである。それでは、例の持論の「商品、貨幣、資本はいずれも流通形態であって、生産過程とも生産関係とも関連はない」は、いったい、どういうことになるか？　つまり、宇野氏は、あるときは「資本は商品と同じく、生産過程とならん関連のない流通形態にはかならない」といい、またあるときは御都合しだいで、「資本は生産の形態であって、商品とはまったくちがったものだ」と言っているわけである。こういう、場当たり式発言が必然的に生まれてきた根拠は、要

するに、宇野氏にとって経済学における「形態」とか「形態規定」とかいう、基本的な概念の意味が全然わけがわからないという、前節で確認済みの事実である。そもそも、「形態」および「形態規定」という決定的に重要な概念の内容を正確に理解しているならば、「流通形態」とか「生産の形態」とかいった、まったく無意味で混乱した珍語<sup>(36)</sup>など、まちがっても思いつくはずはないのである。

(36) わたしは、いまからちょうど五年前に、『経済学における形態規定とはなにか、——いわゆる「宇野理論」の性格規定』

(一) および (二) を本誌上に発表したが、そのなかで、「宇野理論」の最重要な柱のひとつとなっているこの「流通形態」という珍語をとりあげ、「商品・貨幣・資本の流通形態は、事実上も理論上も生産過程と直接関連はなく、生産物がいかなる生産関係の下に生産されたかにも関係はなく、それらは生産過程にとつて外的な形態である」という、まことに気張った、得意の持論について、その「創作」の秘密をつぎのように明かしている。

「こういう「錯乱」した主張がどのようにしてひねりだされたかも容易に察せられる。つまり、こうである、——「商品は流通という運動をする、貨幣も同じく流通という運動をする、資本も同じく流通という運動をする。だから、商品・貨幣・資本は流通形態である」。これは、いったい、どういう文章であろうか？ これ以上に超ノンセンスな文章をでっちあげることができるであろうか？ これは、つぎのような「主張」とまったく同じ性質のものである。

「猿は歩行という運動をする、チンパンジーも同じく歩行という運動をする、人間も歩行という運動をする。だから、猿・チンパンジー・人間は歩行形態である！」(本誌第二十四巻第二号、三〇—三二ページ)。

だが、「流通形態」のばあいは、「流通」という「運動」形態によって、「歩行形態」に辛うじて「結びつく」ことができたが、「生産の形態」という珍語については、「生産」は、どんな「運動」形態であるということになるのであるのか!?

さらに、『資本論』第一巻第一章と第五章についての氏の「理解」の仕方、きわめて特異なもので注目に値する。第一章と第五章についての氏の「理解」するところを、それぞれ寄せあつめてみよう。

第一章について。

人間的労働の経済学的考察(八)

① 「その労働価値説を商品の生産に基いて最初に論じ……」。

② 「第一章商品の最初に、生産物の商品形態が主題たることを指摘し、使用価値と価値とが商品の二要因をなすことを明らかにすると直ちに価値の実体を、商品の生産によってその生産に要する労働として説くのであるが、商品の生産過程自身はここではないとお解明されてはいない」。

③ 「すでに第一章で商品の生産を説いている……」。

④ 「商品は、資本と異って生産の形態をなすものではなく、その生産過程なるものは、一般的な生産過程を包摂する特殊形態の生産過程として説きうるものではない」。

### 第五章について。

⑤ 「資本の出現の後に始めてあらゆる経済の仕方にも共通な労働過程を論じて、資本の生産過程を説いている……」。

⑥ 「第三篇において資本の生産過程を説くとき始めて、その篇の最初に「労働過程」を説くのである。しかし、すでに第一章で商品の生産を説いているために、反ってこの「労働過程」は一般的な労働生産過程としての規定を十分には展開しえないことになっている」。

まず①の「その労働価値説を商品の生産に基いて最初に論じ……」という氏の主張は事実に合わせているであろうか？

もちろん、否である。宇野氏は、この「労働価値説」という言葉がお好きなようであるが、一口に「労働価値説」といっても、いろいろあることぐらい、宇野氏をのぞいて誰ひとり知らぬ者はない。スミスも「労働価値説」をとるが、しかし、マルクスのそれとは根本的にちがっている。マルクスは第一巻第一章で「労働価値説」など「最初に論じ」たりなどしてはいない。かれは、商品を分析して「価値の実体」と「価値の大きさの規定」とを明らかにしているのである。ここで宇野氏が「商品の生産に基いて」と述べているのは、まことに注目し値する。「商品は流通形態にすぎず、生産過程とも生産関係ともまったく関係はない」という主張を持論にしていらっしやるお方が、「商品の生産に基いて」と書き、おまけ

に、③ではごていねいにも「すでに第一章で商品の生産が説かれている」とおっしゃるである。いったい、マルクスが第一章で説いている「商品の生産」というのは、どういう「生産」か、ひとつ説明してみるがいい。どう説明しようとも、それが②の自分自身の言葉と食いちがうことは明らかである。つまり、氏は①では、マルクスは「商品の生産に基いてその労働価値説を最初に論じ」「第一章で商品の生産を論じ」ているのだと言いながら、②では、マルクスが「最初に生産物の商品形態が主題であることを指摘し」と言っている。このあとの「生産物の商品形態」という、一見マルクスの表現を真似た折角の名言も、氏の得意とする持論——「商品とはまさに流通形態である」を正確に適用するときには、「生産物の商品」という流通形態の形態」という珍妙な言葉になるはずであるが、いずれにせよ、氏は、①と③においては「商品の生産」といい、②では「商品という流通形態の形態」といい、そのどちらも第一巻第一章でマルクスにより説かれていると言うのであるから、これでは、マルクスより当の宇野氏の言っていることのほうがはるかに支離滅裂といわなければならない。

ところが、もっとひどいのは、②のなかの「使用価値と価値とが商品の二要因をなすことを明らかにすると、直ちに、価値の实体を商品の生産によってその生産に要する労働として説くのである」というくだりである。「明らかにすると直ちに」という日本語の正常な意味は、いうまでもなく、「明らかにしたのちに、すぐに」ということであって、「明らかにすること」がまずおこなわれて「それからすぐあとに」ということがつづいている、ということである。では、マルクスは、実際に、なんと説明しているか？ かれはまず、商品の交換価値を分析してその奥にかくされた「価値の实体」を明らかにし、それによつてはじめて、使用価値と価値とが商品の二要因であることを説明しているのである。この事実と、宇野氏の記事とを見くらべてみると、宇野氏の眼にはマルクスの説明の順序がそのままにうつることができ

ず、どうしても逆さまにうつつてしまふということが、はっきりわかる。これでは、近視眼どころのさわぎではない。まさしく、強度の斜視である。こうした錯乱的読み方は、「価値の実体を生産に要する労働として説く」という氏の主張のうちにもよく示されている。こういう主張を平然とかかげるような手合は、つぎの事実、つまり、「生産に要する労働」をもって「価値の実体」とするのは「スミスの労働価値説」であつて、マルクスのそれとはなんらかかわりがないということに全然知らないものだ、ということに天下に表明しているものといつてよい。

④において、宇野氏は「一般的なる生産過程」という文字をさも意味ありげにかかげ、同じことを⑤では「あらゆる経済の仕方に共通な労働過程」といい、⑥ではこれを「一般的な労働生産過程」という例の重複語で表現している。だが、「あらゆる経済の仕方に共通な、一般的労働過程」などというものは、きわめて簡單明瞭で、通常の思考能力をもった人ならば誰にでもすぐわかるようなものである。それは、要するに、人間主体がその労働力を支出して、労働手段を媒介として労働対象に働きかけ、これを合目的に形態変化させて必要生産物をつくる、ということではしかない。およそ経済理論を真剣に学び、資本主義社会の運動法則を明らかにした『資本論』の内容を把握しようと心がける人で、この「一般的な生産過程」という言葉の基本的な内容をつかんでいないようなものが、ひとりでもいるだろうか？ もちろん、マルクスも、これぐらいの「常識」をもった読者を念頭においてるのであつて、「生産」とか「生産過程」という文字をみてすぐこれだけのことが考えつかないような、錯乱した俗物的観念にとりつかれたような手合は、全然念頭においていないといつてよい。ところで、宇野氏自身も、マルクスが「最初に商品の生産にもとづいて労働価値説を論じ」（①）とか、「価値の実体を、商品の生産によつてその生産に要する労働として説く」（②）とか、「すでに第一章で商品の生産を説いている」（③と⑥）とか、書きたて、マルクスが第一章で「商品の生産を説いている」のだと力説強



調している。だが、いったい、「商品の生産の説明」という文句はどういう意味か？ それは、「商品」という労働、生産物の生産の説明ということではないか？ つまり、それは、人間主体がその人間的労働力の支出・流動によって労働手段を媒介として労働対象を労働生産物・商品に形態変化させるという意味での「商品の生産の説明」ということではないか。こうした自分自身の力説強調にもかかわらず、宇野氏は、「一般的な生産過程」『あらゆる経済の仕方に共通な労働過程』は第一章では説明されておらず、第五章ではじめて論じられているのであって、それはまさに「方法的に」問題であるとして、マルクスを非難しているのである。それゆえ、こうした宇野氏の論法なるものを客観的にみると、こういうことがわかる。つまり、氏は、まずマルクスが「第一章で商品の生産を説いている」という氏自身の文章の意味が全然わけわからず、ただ語呂の調子でこの文章をならべたてているだけだということ、そしてまた、「一般的な生産過程」とか、「あらゆる経済の仕方に共通な労働過程」とかいう文句の簡単な意味はおよそ健全な常識の持主にはよく理解されているものだがということがわからず、したがって、氏はその腹の中で正常な思考能力をそなえた『資本論』読者の理解能力をまったくばかにし見くびっているものだとということ、これである。だが、これにひきかえ、真に自分で考えようとする読者にたいして終始誠実であったマルクスは、こうした読者の理解能力に全幅の信頼をおいていたのであって、それであるがゆえにこそ、マルクスは、第一章第一節ではことさら「商品の生産過程」の説明をおくことなどすこしも必要だとは考えなかつたのである。<sup>(37)</sup>

(37) 天才マルクスが推敲に推敲をかさねてつくりあげた『資本論』第二版の冒頭の叙述について、その圧縮された文章のなかに盛られている豊富な内容を、その十分な深さと広がりにおいてただしくとらえることは、けっして容易なことではない。ところが形式論理的思考力にすら欠けている俗物にとっては、もっぱら自分の尺度でしか物事をはかることができなにもかか

わらず、マルクスの簡潔な文章のなかに、あらを見つけることにけんめいの努力をはらうことが唯一最大の関心事となっているのであって、たとえば、マルクスが第一章第一節において「商品の生産過程」を説いていないのは問題である、などといった、まさに「自己暴露的」やつつけを得々と並べたてているのである。

ところで、もしその論者が「生産」という言葉をただしくとらえて、これに重点をおきつつ、マルクスの第一章第一節の内容を、マルクスの考え方に則して読みとるならば、むしろその頭にはつぎのような問題が当然に浮びあがってこなければならぬ。いや、より厳密にいうならば、そうした問題をはっきり意識してこれにたいする答えを自分自身で用意するまでにならぬ。いや、マルクスの文章の豊富な内容全体はまだ十分たたくとらえられていない、といつてもよい。では、その問題とはなにか？

いうまでもなく、「生産」においては、人間的労働力の支出・流動、いかえれば、人間主体の活動としての労働がその基本をなしている。しかし、人間主体の活動だけでは、なにも生産されえない。必要生産物を生産するためには、人間の主体的活動のほかに、労働対象と労働手段とが、つまり生産手段がなければならぬ。生産は、つねに、人間的労働と生産手段との「結合」であり、生産物は、人間的労働によって形態変化させられた労働対象である、といつてよい。ところで、労働対象および労働手段についてみると、それらが人間の手をへることなしに自然のままですぐさまそうしたものとして役立てられるということは、未開の社会ならばいざ知らず、発達した「文明社会」にあつてはきわめて稀である。ことに商品生産が高度の発展をとげた資本主義社会では、そういうものは、——原始「採取産業」における労働対象をのぞけば——ほとんど例外といつてよい。この資本主義社会では、生産手段は、ほとんどすべて人間の手をへたものであり、したがって、すでに「価値」をもつものである。それゆえに、この社会を支える必要生産物・商品は、すべて人間的労働と生産手段とのいわば「結合」によつて生みだされたものとして、それ自身のなかに二つの、起源を異にする価値をふくむものとなっている。あるいは、表現をかえていえば、この社会のすべての必要生産物・商品の価値は、二つの、その起源を異にする部分から成り立っている、ということもできる。もっと詳しくいうならば、労働生産物・商品の価値は、かならず、その労働生産物を生産するために投下された人間の主体的活動、いかえれば生きた人間的労働が生産物に對象化したものとしての価値部分と、その生産がはじまる以前にすでに生産手段にふくまれていた価値、いかえればそれらの生産手段のうちに対象化している過去の人間的労働による既存の価値が労働対象の形態変化によつて労働生産物のうちに移ってきたにすぎない価値部分との、二つから成り立っているも

のでなければならぬ。つづめていふならば、労働生産物・商品の価値は、生産手段のうちにくまれている過去の<sup>過去</sup>人間的労働による古い価値と、生きた人間的労働による新しい価値とから成り立っている、といつてもよい。ところで、マルクスは、第一章第一節において「価値の実体」と「価値の大きさの規定」とを論究するにあつて、右に述べたような「生産」の基本的内容を、つまり、生産とは人間的労働プラス生産手段であつて、労働生産物・商品の価値はつねに二つの異なった性質の価値から成つていふという自明の真理を、その念頭においていたであらうか？ もちろん、念頭においていなかった、などということは考えられない。明確に考慮に入れていたはずである。では、肝腎の「価値の実体」と「価値の大きさの規定」の論究において、マルクスの叙述のなから生産手段の意義についての説明が脱け、生産手段の「価値」が「捨象」されてしまつてゐるのは、なぜであるか？

たとえば、マルクスは、「価値の実体」の解明にあつて、交換価値を分析し、「交換価値としては、諸商品はただいろいろにちがつた量でしかありえないのであつて、一分子の使用価値をもふくんではいない」と述べて、つぎのように論じてゐる。「そこで商品体の使用価値を見ないことにすれば、商品体に残るものは、もはやただの労働生産物という属性だけである。しかし、この労働生産物も、われわれの気がつかないうちにすでに変えられてゐる。労働生産物の使用価値を捨象するならば、それを使用価値にしている物體的な諸成分や諸形態をも捨象することになる。それは、もはや机や家や糸やその他の有用物ではない。労働生産物の感覺的性状はすべて消し去られてゐる。それはまた、もはや指物労働や建築労働や紡績労働やその他の一定の生産的労働の生産物でもない。労働生産物の有用性といふしよに、労働生産物に表わされてゐる労働の有用性が消え去り、したがつてまたこれらの労働のいろいろな具體的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてごとごとく同じ人間的労働に、抽象的・人間的労働に、還元されてゐるのである」(前出、四二ページ、ゴシック体―山本)。

「指物労働」、「建築労働」および「紡績労働」というマルクスの文字が明示しているように、ここでとりあげられてゐる「労働」は、生産の最終段階における労働、いわば生きた労働だけであつて、労働対象や労働手段にくまられた過去の労働、たとえば材木を生産するための製材労働とか綿花を生産するための栽培労働などは、すっかり捨象されてゐる。このような過去の労働、死んだ労働の「捨象」は、「価値の大きさの規定」の説明においては、さらにいちじるしいものがある。

たとえば、「一商品の生産において社会的に必要な労働時間」という場合の「生産」が、最終段階における「生産」を指すこ

とは、「たとえば、イギリスで蒸気織機が採用されてからは、一定量の糸を織物にするためにはおそらく以前の半分の労働で足りたであろう」というマルクス自身の文章が明示しているところである。この場合、原料の糸などにふくまれている過去の労働が「捨象」されていることは、誰の目にも明らかであるはずである。あるいは、原料の糸の「価値」は同じだとしても、厳密にいうならば、蒸気織機と手織機とでは、それらから生産物・綿織物に移転・保存される「価値」部分は明白にちがっているはずであるが、これらの価値部分もことごとく「捨象」されてしまっている。

では、なぜ、この場合、生産手段のうちにくまれている過去の労働が「捨象」されているのか？ なぜ、それは、「捨象」されなければならないのか？ ——これこそが、まさに問題なのである。マルクスのうちたてた科学的な価値概念を正確に把握するにあたって、われわれが、マルクスのかかげている説明の文章の奥に、これらの説明とならんではっきりと認識しなければならぬのは、この問題であり、そして、これにたいするマルクスの答えを、われわれ自身の言葉におきかえて明示するという課題がここに提起されていることを明確にとらえなければならないのである。では、これにたいする解答は、どのようにしてひきだすべきであろうか？

右の問題にたいする解答の手がかりは、問題そのものをはっきりとらえることによって、問題そのもののうちに同時にあたえられている、ということができる。「価値の実体」と「価値の大きさの規定」の究明にあたって生産手段の「価値」が「捨象」されたのは、それがまさに過去の労働を、死んだ労働をあらわすものにすぎないからなのである。「価値の実体」をなす労働は、人間の労働力の支出・流動そのものであり、現実の、生きた労働そのものである。過去の労働は、いうまでもなく、人間の労働力の支出・流動が終ってしまったものであり、人間の主体的活動である労働は過ぎ去ったものとしてある。それはすでに生産物に対象化しおえている労働であり、いわば死んだ労働として、生産物・商品の「価値」になりおえているものである。すでに「価値」となりおえているものがふたたび「価値の実体」と成ることができないのは、いうまでもないことである。過去の労働は、過去における「生きた労働」であり、過去において「価値の実体」と成ったものであって、そういうものとして現実に生産手段に対象化・物化してその「価値」に成りおえているのである。それゆえ、「価値の実体」としての生きた人間の労働をとらえるには、この過去の、「生きた人間の労働」を「捨象」することが必要であり、また「捨象」することが可能でもあるのであって、生産手段の「捨象」は、この意味においてきわめて正しい論理的方法であるということが出来る。

右と同じようなことは、「価値の大きさの規定」の究明の場合についてもあてはまる。労働生産物・商品の「価値」のなか

には、実際には生産手段から移転してきた「価値」部分もなければならぬ。だが、この移転「価値」部分についてみれば、それは人間的労働がはじまる以前にすでにある一定の大きさの「価値」として生産手段のうちに存在していたものであって、それがそのまま生産手段から労働生産物・商品のうちに移ったものにすぎない。それは、すでに存在していたものが、たんに姿をかえて再現しただけのものである。ところが、肝腎の問題は、といえは、それは、労働生産物・商品のうちにつくりだされた「価値」の大きさがどのように規定されるか、ということである。この問題を考えるにあたっては、すでにある一定の大きさを規定された価値が生産手段のうちに在ることを前提することはゆるぎない。また、この一定の大きさの「価値」がそのまま労働生産物・商品のうちの「価値」部分としておさまるといふことも、前提することはできない。むしろ、この生産手段からの移転「価値」部分は、たんにそのまま大きさを変えずに生産物に再現するにすぎないものであるがゆえに、一方における「人間的労働プラス生産手段」と他方における「労働生産物・商品の価値」をつきあわせて、後者の「価値」の大きさの規定をつきとめるためには、両者に共通な、すでに大きさを規定された生産手段の「価値」と移転「価値」部分とを、両者から「消去」することが必要であり、また、そうすることが、「価値」の大きさの規定をつきとめるための唯一・可能な正しい方法でもあるのである。生産手段の「価値」と移転「価値」部分とを「消去」することによって、はじめて、「人間的労働」と労働生産物・商品の「価値」とを直接つきあわすことができ、「価値」の大きさを「人間的労働の量」に直接結びつけることができ、こうして、はじめて、「価値の大きさの規定」が明確につきとめられることになる。そして、こうして「価値の大きさの規定」が明確にされたところで、今度は、まさに「捨象」された生産手段の「価値」について、それが、その大きさをどのようにして規定されたものであるかということがはっきりととらえられることになるのである。

これを要するに、「価値の実体」と「価値の大きさの規定」の究明にあたっては、生産手段にふくまれている「価値」＝「過去の、死んだ労働」を「捨象」することが、論理的にみて唯一の正しい方法なのである。このような「捨象」なしには、右の二つの基本的な事柄についての究明は、一步も進められえないのである。マルクスは、いまさらいうまでもなく、こうした正しい論理的方法を駆使して主題の論究をすすめているのであるが、こうした当然の論理的方法はおよそ科学的論究においてはつねに用いられるのであって、それゆえにこそ、マルクスは、これについてくどくどしくことわるまでのことはないと考え、「生産手段の捨象」なるものを当然のこととしておこなっているのである。彼マルクスとしては、一世紀以上もたってから、「一樣に金何円という価格をもっているという同質性」などというまがいものをひけらかして、「これこそマルクスの価

「値」だと吹聴してまわるような「マルクス経済学者」とその亜流どもが簇生しようなどは、もちろん、夢にもおもわなかったのである。

ところで、「価値の実体」と「価値の大きさの規定」の論究にあたって生産手段のなかにふくまれている「価値」＝「過去の労働」が「捨象」されなければならないということの根拠としては、右に述べたような「唯一の正しい論理的方法」ということだけに過ぎるものではない。いまひとつ、ぜひとも考慮にいれなければならないのは、『資本論』第一巻第一章第一節における考察の対象の限定、いいかえれば、『資本論』全体を通じての理論展開における第一章第一節の「位置」の規定である。この第一章で考察の対象とされている「商品」は、なるほど資本主義社会の商品であり、したがって資本によって生産され剰余価値をふくむものとしての商品ではあるが、しかし、理論展開の最初にとりあげられたものとしての商品として、「資本によって生産された」という規定を捨象されたところの商品として、考察されている。別の面からいうならば、ここの「商品」という形態規定が示している社会的生産関係は、資本主義的私的所有から「資本主義的」という規定を捨象された私的所有であり、その意味で第一章における考察の対象となつている私的所有は、たんなる私的所有、もしくは私的所有一般である、ということが出来る。「資本主義的」という規定を捨象された私的所有を考察するということは、資本家と賃銀労働者との対立関係が捨象されていることであり、私的所有者は私的生産者であると同時に労働力の担い手であるということとを前提している、ということである。それゆえ、生産手段の所有者は同時に生産手段を自分の労働によってつくりだした私的生産者自身であり、かくして、生産手段のなかにふくまれている「過去の労働」も労働生産物・商品をつくりだす「生きた労働」も、ともに同じ私的生産者自身の人間の労働力の支出＝流動であり、同じ労働力の担い手の活動である。それゆえ、同じ労働力の担い手の労働について、生産手段と労働生産物との両者のうちにふくまれている同じ「過去の労働」の対象化したものを「消去」することは、論理的にみて正しいものといわなければならない、これによって、「生きた労働」と労働生産物・商品の「価値」とがただしく結びつけられるのである。だが、商品生産の発展にともなつて私的生産者が分解をとげ、私的所有者＝資本家と無所有者＝賃銀労働者との階級対立関係のもとでの資本主義的商品生産においては、生産手段は資本家のものであるとして労働者に対立し、むしろ賃銀労働者の「生きた労働」を吸収するものとなるのであつて、ここでは、生産手段および生産手段の「価値」を「捨象」することは許されないばかりか、そういう「捨象」は資本主義的生産の本質を見誤らしめるものとならざるをえない。こうした、資本主義的生産における生産手段の決定的な意義と役割を考慮にいれることによって、はじめて、生産

手段が理論的展開のどこにおいて正当にとりあげられなければならないかが、明瞭に把握されるのである。

そこで、本題にもとって、「商品による商品の生産過程」という文句をとりあげ、それがどういう内容を意味するものであるかを考察してみることにしよう。この文句のはじめに出てくる「商品による」という言葉の「商品」については、この文句の発明家、宇野氏は「労働力」という商品をそのなかにいれている。というよりも、もっと端的にいえば、宇野氏は、この文句の最初の「商品」としてはもっぱら「労働力」＝商品を念頭においている、といったほうが当たっている。そこで右の文句の最初の「商品」のかわりに「労働力」＝商品という言葉を入れてみれば、「労働力」＝商品による商品の生産過程」という文句をとりあげてみよう。この「生産過程」なるものは、いうまでもなく「資本による商品の生産過程」という文句は資本の総運動過程—— $G \begin{matrix} \swarrow P_m \\ \searrow A_k \end{matrix} \dots (生産過程) \dots W' - G' -$ の一部分を成しているにすぎない。右の総運動過程のうち最初の $G - P_m$ および $G - A_k$ は、商品である生産手段と労働力との資本による購買を示し、その最後の $W' - G'$ は生産物＝商品の販売を示し、これら両者はともに資本の総運動過程のなかでの流通過程を成している。そこで、問題の「生産過程」についてであるが、ここでは $P_m$ と $A_k$ とは、はたして商品として機能するものとなっているであろうか？  $P_m$ と $A_k$ とは、それ自身価値をもつ商品として「生産過程」にはいるものであろうか？ 問題をこのように明確な形で提起しさえすれば、これにたいする答えはおのずから明らかとなる。「生産過程」においては生産手段も労働力も、ともに生産要素としての形態においてのみ、生産要素として機能する。これら二つの生産要因は、資本家によって購買されるまではりっぱに商品であったとしても、購買過程がすんでそれらが資本家のもとで「生産過程」にひきいれられた瞬間から、それらは商品という形態をきっぱりと脱ぎすてて、たんなる生産要素とし

ての形態、しかもちえないものとなる。つまり、「生産過程」に入るやいなや、生産手段も労働力もはや商品ではなくなるのである。それゆえ、第一に、「商品によって商品が生産される生産過程」という文句そのものが、まったくのたわごと、にすぎないことは明白である。それは、形態について完全に錯乱したとらえ方しかできないという、論者の「性格規定」を実証するものでしかない。第二に、この「生産過程においても生産要素が商品形態をとっている」という文句そのものは、同じ宇野氏のもっとも得意とする「商品形態は、生産過程とも生産関係とも関係のない、たんなる流通形態にすぎない」というメイ文句と直接に矛盾するものである。「商品」という形態は流通形態にすぎない」と言っているが、「流通過程」を離れて「生産過程」にはいっていてもなおかつ生産要素は「商品」の形態をとっていると、なぜ言えるのか？

「生産過程」にはいるやいなやそれらは完全かつ徹底的に「商品形態」を脱ぎすてしまうこと、もしいささかでも「商品形態」を帯びているものであれば、それらはけっして生産要素として生産過程で機能することはできないものだということ、——これ以上に明白なことが、ほかにあるだろうか？

「商品によって商品が生産される過程」などという、一見もっともらしく聞えるたわごと、にいかれてしまった俗物は、こころみにつぎの例について考えてみるがいい。いま、生産要素としての綿糸と手織機とを商品として購入し、雇われた手工的労働者をつかって綿織物・商品を生産する資本家的工場主と、自家労働によってつくった綿糸と手織機とをもって同じ綿織物・商品を生産する独立手工業者とがいるとしよう。ついであるが、これはでまかせの仮定ではなく、——本論稿の注（30）を読めばわかるように、——歴史的にも厳存した事実であり、また理論的にもりっぱに根拠のある設例である。後者、つまり独立手工業者の場合、綿糸も手織機も商品として購入したのではなく、労働力も、もちろん自己労働力であって商品ではない。これにひきかえ、資本家的工場主の場合には、生産諸要素、 $P_m$ も



AK も、すべて商品として購入されたものである。だが、両者とも「生産過程」に入ったときに、両者のもちいる生産要素のあいだに、いったい、どういうちがいがあるであろうか？ 資本家的工場主のもとでは「生産過程」に入つた生産手段と労働力とはいぜんとして「商品」の形態をとっているが、独立手工業者のもとでは、それらは「商品」の形態をとらない、ただの生産要素である、とでもいふのであろうか！？

ところで、「商品による商品の生産過程」というメイ文句がひねりだされたわけは、「商品による商品の生産過程」であるところの「資本の生産過程」においてのみ、「価値の実体」が「論証」されるべきだという、例の持論を「合理化」することがその狙いであつたのである。そこで、「資本の生産過程」においてはたして「価値の実体」が「論証」されるかどうか、右の設例のうち、資本家的工場主の場合について簡単に吟味してみよう。綿布一〇ヤールの生産に必要な綿糸の価格をたとえば  $a$  円とし、耐用年数一〇年の手織機の同じ単位生産物当り必要な手織機償却費を  $b$  円とし、同じ単位生産物の生産に必要な投下労働時間を五時間としよう。「労働過程」と「生産過程」とがまったく同じだとして、さて、この資本家のもとで手工的労働者による「労働過程」、つまり「生産過程」がはじまると、その五時間の労働力の支出・流動によつて、どういふ結果がうまれるであろうか？ ここでの考察にとつてなによりも第一に要求されるのは、マルクスが強調しているところの「労働の二面性」を明確に把握していることである。手工的労働者は、まず、特定の具体的形態をとつた労働力の支出・流動、つまり具体的労働によつて、労働手段である手織機を媒介として労働対象である綿糸に働きかけ、その形態を変化させて、生産物・綿布をつくりだす。かれの具体的・有用的労働により、綿糸と手織機とは、形態変化をうけ綿布になることによつて、それぞれ生産手段として生かされる。このような形態変化が、その第一の側面である。つぎに、形態変化により生産手段として生かされるということ

によって、両者のうちにふくまれてゐる「価値」が、生産物・綿布に移され保存されることになる。これが第二の側面である。この二つの側面または結果は、手織工の労働の具体的形態によって、つまりその具体的・有目的労働によってなしとげられる。だが、それと同時に、かれの人間の労働力の支出・流動は、その具体的形態にかかわりのない人間の労働力の支出そのものとして、つまり、抽象的・人間の労働として、その五労働時間分が生産物・綿布に対象化・物化して、綿布のうちにあらたに一定分量の「価値」をつけくわえる。このあらたに生みだされた「価値」をc円という価格で示すしよう。このc円という「あらたな価値」が生産物・綿布のうちにつくりだされるといふのが、第三の側面または結果である。以上をまとめれば、つぎのようになる。すなわち、手工的労働者の人間の労働力の支出・流動は、その一面の具体的労働によって生産手段を生産物に形態変化させることによって、生産手段の「価値」 $\parallel (a + b)$ 、 $\text{II}$ を生産物・綿布のうちに移転・保存させると同時に、他の一面の抽象的労働によって、綿布のうちに「あらたな価値」 $\parallel c$ 円をつくりだし、かくして、特定の形態・使用価値と「価値」 $\parallel (a + b) + c$ とをもちた商品・綿布がここに生産されることになる、と。

みられるように、「生産過程」についての右のような分析は、そのそもその最初から「価値の実体」がほかならぬ抽象的・人間の労働であつて、「労働の二面性」がまさしく商品の使用価値と「価値」として社会的に示されるものだということが明確に把握されていることを前提とし、そのうえで、はじめて可能となつてゐるものである。「価値の実体」をはじめに的確に究明することもせず、またその究明の必要性もわけわからず、「価値」を「すべて一様に金何円という価格を有しているという、同質性」などに求めているといった、古典派よりはるかに低俗な「価値」概念にとつぶりつかつてゐるような頭脳では、そもそも商品の「生産過程」そのものの説明もできず、いわんや「生産過程」

の分析を通じて「価値の実体」を「論証」するなどという「逆立ち」芸当は、これっぽっちもできるものではないのである。いや、そればかりではない。右のような「生産過程」の内容をただしく把握することによって、われわれは、つぎの事実を認識することができる。それは、われわれが「商品の生産過程」の解明を通じて「価値の実体」を明らかにしようとする場合には、その生産に要する生産要素・生産手段が商品であることはいささかも必要でない、というよりは、むしろ厳密にいうならば、そのさいそれらが商品であることはなんの意味もたず、かえって商品であることは「価値の実体」の把握を阻害するものでしかない、ということである。なぜか？ といえ、それは、さきの例が示しているように、生産物・綿布の「価値」は  $(a + c) + d$  であり、そのうち  $(a + c)$  は生産に先ぎだつて生産手段のうちにくままれていた既存の「価値」  $= (a + c)$  がそのまま生産物に移つただけのものであるからであり、結局この「価値」部分については、「価値の実体」は追究されえないままに終わらざるをえないからである。ここからして、生産物・商品の「価値の実体」を究明するためには、生産手段のうちの既存の、たんに移転するだけの「価値」部分については、これを捨象しなければならない、ということが出てくる。たとえ生産手段が購入された商品であっても、その「価値」はこの場合理論的に捨象されなければならない、ある一定の自然的形態をもつ生産要素としてのみ考察されなければならない。既存の「価値」  $= (a + c)$  を捨象することによって、はじめて生産物のうちにあらたに生みだされた「価値」として  $c$  がとりあげられ、このあらたな「価値」が、どこから、どのようにして生みだされたかということが正しく論究されるのであり、かくして、このあらたな「価値」を生み出すものは、人間的労働によつてはじめて生かされる、生産手段ではなくして、ほかならぬ人間自身の主体的活動・人間的労働力の支出そのものであることも、明確にとらえられることになるのである。<sup>(38)</sup>

(38) 読者のすでにお気付きのように、ここに述べられている生産手段の「価値」の捨象ということは、さきに本論稿の注(37)で詳細に説明されたところ、すなわち、『資本論』第一巻第一章における「生産手段および生産手段の価値の捨象」ということと同じ事柄を、別の側面からとらえたものにすぎない。

以上によって、われわれが「価値の実体」を論究するさいには生産要素の商品形態を捨象しなければならぬこと、とりわけ人間的労働力についてはその「再生産費」は生産物・商品の「価値」とはならぬ必然的な関連をもつものではなく労働力の商品形態は当然に捨象されなければならないこと、その反対に生産手段および人間的労働力の商品形態に執着しているかぎり永久に逃れることのできない袋小路に入りこんでしまうのが落ちだということは、疑う余地なく明らかである。この点からみると、「商品による商品の生産過程」というメイ文句がまさにいかさま師の身上とするペテン的空文句にすぎないことは、いまさらいうまでもないところといつてよい。マルクスが『資本論』第一巻第一章の冒頭で、生産手段と人間的労働との「結合」としての生産とそのうちでの人間的労働の決定的地位という自明の真理——ただし、通常の論理的思考能力を欠いた詭弁「学者」にとっては永遠に手のとどかない真理——を念頭において、「資本主義的」または「資本による」という規定を捨象してたんなる商品生産をとりあげ、この種の商品进行分析して「価値の実体」を明確に論究しているのは、科学的に完全に正しいものといふべきなのである。(39)

(39) 生産における人間的労働の決定的な地位というこの自明の真理は、A・スミスも——たとえ、かれは「労働の二面性」を明確にとらえず、歴史的生産関係の観点を見失っているという致命的な欠陥は免れえなかつたにせよ——これをよくとらえていたのであって、かれは、名著『諸国民の富』の第六章の冒頭でまず、「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する社会の初期未開状態」を前提して、そこでは

「さまざまのものを獲得するために必要な労働量のあいだの割合が、これらのものをたがいに交換するためのある基準になり

うる唯一の事情であるように思われる。」(前出、四九ページ、大内・松川訳一三二ページ、傍点―山本)

と述べ、

「こういう事態のもとでは、労働の全生産物は労働者に属し、またある商品の獲得または生産にふつう雇用される労働量は、その商品がふつう購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働量を規制しうる唯一の事情である」(前出、四九―五〇ページ、大内・松川訳一三二ページ、傍点―山本)

として、スミスのとらえた「価値の実体」なるものを裏付けると同時に、スミス流の「価値法則」、つまり「交換価値の法則」をはっきりと説明し、しかるのちに、「資財が個々人の手に蓄積され」た場合の「資本主義的生産」についての叙述にうつって、

「職人たちが原料に付加する価値は、この場合には、二つの部分に分解されるのであって、その一つはかれらの賃銀を支払い、他は雇主が前払いした原料と賃銀との全資財に対する利潤を支払うのである。」(前出、五〇ページ、訳一三二ページ、傍点―山本)

と説明しているが、これは——たとえ、さきに述べた諸欠陥に問題があるとはいえ——科学的に正しい方法にそったものといふことができる。これにくらべれば、「すべて一様に金河円という価格を有しているという、同質性」などという、まやかしの「価値概念」をふりまわしながら、「商品による商品の生産過程」であるところの「資本の生産過程」においてこそ「価値の実体」は明らかにされるべきだという、まさにベテン的空文句でマルクスを非難し、しかも、自分自身ではなにひとつ「論証」もするでないといった「マルクス経済学者」宇野氏自身は、科学の方法についての完全な無知の典型の実例を提供するものとして、まことに貴重な存在であるといつてよい。

ところで、これまでの説明と関連して、『資本論』第一章第一節では自明のこととして「労働過程」についての説明が省かれ、生産手段の役割が捨象されているのにたいして、第五章において「労働過程」が詳しく説明されているのは、いったいなぜか? という当然の疑問がおそらく生じてくるであろう。この問題については、さきに(注37)の終りのところでふれておいたので、以下で簡単に答えておこう。

第五章での考察の対象は、いうまでもなく「資本の生産過程」であって、その「流通過程」は、考察の外におかれている。「資本の生産過程」においても、それが「生産過程」であるかぎり、その中心をなすものが人間的労働力の支出・流動として

の「労働過程」にはかならないことは、変わりがない。人間の労働は、もとより「労働の二面性」の把握にもとづいて、具体的労働と抽象的労働との二面において考察されなければならないのであって、具体的労働により労働対象の形態変化、つまり使用価値の生産がおこなわれるのが、その第一節で考察される「労働過程」であり、抽象的労働により生産物の価値形成および価値増殖がおこなわれるのが、その第二節の主題である「価値増殖過程」である。第五章第一節で、マルクスは「労働過程」を考察するにあたって、まず労働対象、労働手段およびこれらにたいする人間主体の働きかけとしての具体的労働について一般的な説明をしているが、それは、この一般的な説明にもとづいて、はじめて資本の物的担い手または体現者としての生産手段が具体的労働によって生かされ、その価値が生産物に移転・保存されるという、賃銀労働者による資本家への「無償の贈物」がはじめて明らかにされることのできるからであり、したがってまた、あらたな価値を付加することによって、生産手段の価値を移転・保存させるという、資本主義のもとでの人間の労働の天賦の資質が明確に把握されるからである。そして、そのために、第一章第一節で意識的に——十分な根拠をもって——省略・「捨象」された「労働過程」をとりあげ、これについて簡明かつ基本的な説明からはじめて、その内容の解明を順序たたく展開しなければならなかったものである。とりわけ、「資本の生産過程」の場合には、その「労働過程」は、第一章第一節で考察されたたんなる商品生産、いかえれば資本主義的形態を捨象した商品の生産の場合とちがってこの資本主義的形態に特有の、きわめて重要な特徴をそなえることになるのであって、このような特質をもつ「労働過程」を説明することは、資本主義的生産方法の展開についての論究をすすめるにさいして、決定的な意義をもっているのである。マルクスは、「労働過程」についての一般的・基本的な内容の説明につづいて、第一節の最後において、資本のもとでの「労働過程」の重要な特質をはつきりと指摘しているのである。

第五章第一節でまず「労働過程」の考察がおこなわれなければならない理由としてつぎに考えなければならないのは、「資本の生産過程」にあつては、生産における客体的要因として本来人間の主体的活動によってつくりだされ、かつ生かされるものとしての、死んだ生産手段が、人間主体から離れ、自立化して、逆に人間を支配するものに、人間の労働を吸収し「搾取」する独立的存在になり変わる、という客観的法則である。これはまた、「資本の生産過程」にとつて決定的に重要な側面であるが、この「顛倒」は、「労働過程」について、とりわけ生産手段についての一般的・基本的説明にもとづいてはじめて説明されることができるのである。

以上述べたところ、およびさきに（注37）で説明したところを読みあわせることによって、読者は、マルクスが、第一章第

一節で「労働過程」を考察の対象にせず、第五章ではじめてこれをとりあげたこと、この理由を理解することができるであろう。そして、このマルクスの採った叙述方法こそ、科学的にみてもっとも正しいものであることをはっきりと認識されることであろう。こうしたマルクスの科学的方法に思いをいたすでもなく、第五章第一節の「位置」もわけわからず、第五章第一節から無断で剽窃してきた不消化な断片的な内容をば「労働生産過程」などという、錯乱的重複語で表現しながら、あきれたことに、その剽窃の原本を著わした当の著作者にたいして、あれこれと錯乱的いかりをつけている御仁が、「マルクスを超越するマルクス経済学者」と称されているのである！

宇野氏がみずから独創して大いに意味ありげに書きたてている「労働生産過程」および「商品による商品の生産過程」という文句がどのような性質のものであるかは、以上によってほぼ明らかにされたとおもわれるので、なおこのついでに、宇野氏の「原理論」的考え方の本質をよりよくつかむことができるようにするために、「資本の生産過程」のうちでもっとも重要な意味をもつ肝腎の「価値増殖過程」について、宇野氏がどんな説明をあたえているかということとを簡単にみておこう。氏の名著『経済原論』の第二篇第一章「資本の生産過程」の第二節は、さきにあげた「価値増殖過程」というダブル迷語をその表題としているが、その第二節のはじめで宇野氏が、マルクスの価値概念をそれと明記せずに無断借用、つまり剽窃して「価値の実体」も「価値規定」もことごとくマルクスの説明をそっくりそのままこっそりととりいれて、なんのことわりもなしに、いきなり「今、労働力の再生産に要する一日の生活資料が六時間の労働で生産され、その代価を三志とすれば」という文章でその説明を開始していることも、すでにわれわれの見ただころである。「労働者」の一日の労働時間を六時間とすれば、かれは「労働力の代価」と同じ額の三志を資本家にあたえるだけで、資本の「価値増殖」はおこなわれない。「価値増殖」がなければ、資本も資本家も存立するわけにはいかなない。では、どのようにして、一日の労働時間を六時間以上に延長して、「労働者」に不払の労働をおこなわせ、これに

より「価値増殖」をうまくやりとげることができるか？ まさに「価値増殖」という資本の本質を示すこの核心的問題にたいして、宇野氏がどんな超マルクスの解答をあたえているか、まあよく書いてみたまえ。これはすでに本論稿の注（26）のなかで引用済み（本誌第二十九巻第一号、五九ページ）のものであるが、その超マルクスの特性をぐつとよく玩味していただくために、その解答の精髓部分をもう一度つきにかかげてみよう。

「しかし一日の労働力を商品として買入れた資本家は、労働力の消費を綿糸六キロの生産に要する六時間に留めなければならぬ理由はない。また労働者としても、その労働力を商品として販売せざるをえないという事情は、その労働時間を自己の生活資料の再生産に要する労働時間で打切ることを許すものではない。今、若し一日の労働が一二時間行われるものとする、紡績資本家は、……三志の剰余価値をうることになるのである……」（前出、五九—六〇ページ、傍点—山本）。

みられるように、宇野氏の解答はきわめて懇切丁寧であって、まず資本家の立場に立って労働時間延長の理由を説明し、それから労働者の側からみでの延長の理由を説明するという具合に、まことに至れりつくせりである。そこで、宇野氏の叮重をきわめた説明を、つぎに問答式に書きあらわしてみよう。

問——なぜ、資本家は労働日を六時間以上に延長しようとするのか？

答——なぜならば、資本家は、労働日を六時間にとどめなければならない理由がないからである。つまり、資本家は、六時間以上に延長したいから延長するのである。

問——なぜ、労働者は六時間で労働を打切ることができないのか？

答——かれは労働力を商品として売らなければ生活できない事情があるからである。そのために、労働日を六時間にする事ができず、それが一二時間にでも一六時間にでも、つまり資本家のお好みのままに延長されても文句はい



えないのである。

読者諸君、なんと宇野氏の解答の明快であることよ！ この懇切丁寧な解答をもっとわかりやすくいえば、こういうことである、つまり、資本家が「価値増殖」しようとおもえば、思いどおりに労働日を延長することができ、労働者は労働力を買ってもらうために、その延長に反対することはできない。「価値増殖」したいから「価値増殖」ができる！ いっさいを決定するのは資本家の胸先三寸、その貪欲ひとつである！

なんとみごとに、世紀的説明であろうか！ このような「理論的」理由づけをきいて随喜の涙をながさないような資本家が、この世に一人でもいるであろうか！ 「労働日を延長したいから延長できる、価値増殖したいから価値増殖できる」という、この徹底した純粋資本家魂の結晶ともいうべき「理由づけ」は、これまでどんなに骨の髄からの御用学者でもあえて考えだすことのできなかったものであり、その意味で、宇野氏が俗流経済理論の歴史的流れのなかでずばぬけて傑出した地位を保証されなければならないことは、ほとんど確実であるといつてよい。<sup>(40)</sup>

(40) この点からみると、「革命的マルクス主義」なるものをかかっている黒田寛一氏が、ことさら『宇野経済学方法論批判』という特異の題名をつけた大著をものして、そのなかで宇野氏に特別の讃辞を呈し、「独自の理論的省察に裏つけられた『学問の独自性』にかんする信念をつらぬく」ものとか、「体系的把握をめざした学問的研究」とか、「独自の思弁的追求」とか書きたてている(本誌第二十四巻第二号、二四—二五ページ参照)のは、まさに根拠のあることであって、宇野氏の所論の超俗流的「独自性」、資本家びつたりの「体系的把握」、純粋資本家魂に徹したトゥトロギー的「詭弁追求」が、これによっていよいよ飾りたてられることになるのは、けだし理の当然といふべきであろう。

いまさら付け加えるまでもないが、右のような資本家にびつたりのトゥトロギー的「理由づけ」を並べたてているという一事によって、われわれは、宇野氏が『資本論』第一巻のなかでもっとも重要なポイントのひとつとされている

る第三篇「絶対的剰余価値の生産」の全体について、なんらまともな理解をひとつとしてもっていないこと、マルクスが刻苦して書きあげた「価値増殖の秘密」の暴露は氏の頭のなかからすっかり脱け落ちてしまっているということ、客観的に確認を知ることができず。こうした俗物的観点にしがみついている論者は、なんと自称していようと、客観的にはまぎれもない反マルクスの御用学者でしかないことは、動かしがたい事実といってよい。ペテン師は、かれ独自の、一見超俗物的ペテン論法をふりまわしているかぎりでは、大勢の俗物をだますことができ、その正体はなかなかばれにくいものであるが、なまじ、「価値増殖」などという科学的理論の中心テーマをとりあげてマルクスの口調を真似ようとすれば、たちまち馬脚をあらわすという結果におちいらざるをえないのである。

(41) この判定にたいして、宇野氏がとうてい承服できないというのであれば、ひとつ、「標準労働日」(Normalarbeitsag) というマルクスの基本的概念について、それがどんな意味をもっているかということの説明してみられるがいい。「標準労働日」という基本的な概念をぬきにして労働日の延長問題など論ずる資格もないものだということがちーともわからない「学者」は、どうしても括弧つきの「マルクス経済学者」として特徴づける以外に方法はないのである。

以上によって、宇野氏による『資本論』の「原理論」的読み方の性格はほぼ的確に知ることができたと考えられるので、つぎに、「価値法則」についての宇野氏の説明をとりあげて、若干の考察をくわえてみることにしよう。